

# 共に支え、つながり、育ち合う

入江礼子

「共に支え、つながり、育ち合う」。以前勤務していた幼稚園で、園の方針をキャッチコピーで示す必要があったとき、すぐに浮かんだのがこのコピーだった。考えに考え抜いて出てきたコピーではない。もともとあったものがポロツと形になって生まれた、そんな感じである。「ああ、私はこんなことを考えていたのだ」と、その言葉を口に出してから、いまさらながらに思ったことを今でも鮮明に覚えている。そして以後、このコピーに支え続けられることになる。

振り返ってみれば今からおよそ三十年前、私は二番目の子どもを出産し、「ああ、これで私もしばらく動けなくなつたな」と感じたとき、大学時代の友人と『遊びをみつめる』という小さな同人誌(というより、子育てや近況を伝え合う手作りの冊子)を



始めた。友人は全国に散っており、会おうと思ってもすぐに会える距離ではない。と  
いって電話では費用がかさむ。結局、年に三、四回子どもにまつわる近況を書き合い、  
それを私の元に集約し、その原本を恩師のいる大学で当時の最新の複写機でコピー  
させていただき、冊子にしてみんなの手に送った。冊子を作るといふことに即時性  
はないものの、それができるまでの時間はまた成熟のときであつたようにも思う。  
こうして友人たちと緩やかにつながりながら、そのときにできる活動が続けてき  
た。「共に支え、つながり、育ち合う」というコピーはまだ生まれてはいなかったが、  
言葉の生まれ出する前のその感覚はそのときに培われたといえる。

このコピーが生まれた幼稚園での日々。むしろ緊急性に押し出されて生まれたよう  
なところがあった。「子どもたちが幼稚園に来て、ああ楽しかった、明日も幼稚園で  
遊びたい!」と思ってくれるような幼稚園にするためには、まず子どもたちと、そし  
て保護者と、さらに同僚である職員と「共に支え、つながり、育ち合う」関係をつ  
くらなければどうにもならない。そんな緊迫感があつた。当初はそのどれもが脆弱だっ  
たのである。

幼稚園の日々は日常そのもの。種々雑多なことが、一見何の脈絡もなく起る。ほ  
んと次に次から次へという感じで休む暇も考える暇もない……といつては言い過ぎか  
もしれないが、ともかく立ち止まってゆつくり考える余裕は長い休みのときですらな

いことが多かった。自分は今、何をしようとしているのか、そんな方向性すら見いだせなくなってしまうとき、ふと、このコピーが頭をよぎる。「そうだった。この方向だった」と熱い頭を冷やしつつ自分に戻る。そんなことを繰り返すうちに、次第にそのコピーが現実のものに近づいていった。

そして今。新しく児童学科を立ち上げつつあるという創成期に身を置いている。何もかもが協働作業である。そのような状況の中、学科で一歳半から三歳までの乳幼児の親子十組のグループを立ち上げた。今のところ月に一度である。わずか月に一度で何ができるのか。担当教員が五名膝つき合わせて侃侃諤々かんかんがくがくの議論を行った。保育、音楽、造形と教員の専門性は皆違う。「一時間半という短い保育時間をどのように組み合わせるか」「日常ではない、大学に親子で来ることを意味のあるものにしなければならぬ」など、議論は尽きなかった。実際に違う専門をもつ教員が保育の場を創っていくというのは、専門性があるゆえになかなか難しいのが現状である。その難しさを突き破って、ともかく議論をして保育の場を創る。でなければ学生に教えていることとの間に齟齬そごが生じてしまう。もう面倒くさい、抜けた方が楽という思いが脳裏をかすめなかったわけではない。しかし、大変さの中に異種の人たちと場を創るおもしろさがあるのも事実であった。



このグループを学科では今のところの最高学年である二年生のインターンシップの場として位置付け、今年度から正式に学生が数名入ることになった。月一度の一時半の保育のために、およそ七コマ分の時間をかけて教員も共に準備を行う。学生たちはある目的に向かっての議論ということあまりしたことがないためもあつてか、ときにはけんかの様相を呈することもある。それを恐る恐る見ている学生もいる。仲よしグループではない同級生と話す経験がほとんどないかもしれない。そんな様子を教員も共有しながら見守る。侃侃<sup>かんかん</sup>譁々<sup>たがく</sup>は教員も学生も同様である。

学生たちが養成校で学んだことを自分の中で統合するために、複数の教員が保育の場を協働して創り、学生と共に保育を「ていねい」に行う。これを通して学生の中に育つものがあることを確認しつつ行っているこの乳幼児親子グループの活動は、確かに莫大な時間がかかるし、教員たちも唯我独尊ではいられない。しかし、これを取り越えないことには学生は育ちにくいのではないだろうか。

学生の育ちをその言葉の端々、そして彼女らがまとめた冊子から確認した今、「共に支え、つながり、育ち合うこと」というコピーを心に秘めて、侃侃<sup>かんかん</sup>譁々<sup>たがく</sup>のときを支え、これからも地道に「育てる」ことを続けていければと思っている。

(共立女子大学)